

# 地域文化の 再構築における 映像の活用



2024年 1月20日(土)

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

歴博映像フォーラム17

# 地域文化の再構築における 映像の活用

2024年1月20日(土) 13時00分～16時30分

会場：国立歴史民俗博物館 講堂

主催：国立歴史民俗博物館

## プログラム

- |             |  |
|-------------|--|
| 13:00～13:05 | 開会の挨拶<br>西谷 大(国立歴史民俗博物館・館長)                                  |
| 13:05～13:15 | 趣旨説明<br>内田 順子(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授)                          |
| 13:15～14:15 | 外間 政明(那覇市 市民文化部 文化財課・担当副参事)<br>「那覇のまちの歴史的変遷 - 古地図・絵画・写真を中心に」 |
| 14:15～15:15 | 春日 聡(多摩美術大学・非常勤講師、<br>国立歴史民俗博物館・客員准教授)<br>「超劣化フィルムのデジタル復元」   |
| 15:15～15:30 | 休憩   |
| 15:30～16:25 | 内田 順子<br>「デジタル復元の成果を地域研究に活かす」                                |
| 16:30       | 閉会   |

総合司会 : 川村 清志(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・准教授)

---

# 開催にあたって

内田 順子(国立歴史民俗博物館)

歴博は、1988年、民俗研究の一環として「民俗研究映像(現在の名称は歴博研究映像)」の制作を開始しました。それ以降、フィールドワークによる研究成果を、研究者自身が映画監督の役割を担って、「映像による民俗誌」、あるいは「映像による論文」という形でまとめてきました(今まで制作した作品は本予稿集16~17頁をご参照ください)。

これまでに制作した歴博研究映像32作品のうち、沖縄県の民俗や歴史をテーマにしたものもつとも多く、4作品あります。①『黒島民俗誌』1992年度、②『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』1995年度、③『沖縄の焼物－伝統の現在』1999年度、そして、昨年度の歴博映像フォーラムで上映した④『ブーンミの島』の4作品です。

沖縄県の民俗や歴史をテーマに制作した映像がこれだけあるので、これらの映像をよりどころとして各地域との関係を新たに結びなおし、映像をてがかりとして地域の歴史や民俗を読み解く方法や映像の活用の方法を検討するなどして、歴博研究映像の総合的な利活用を推進したいと考えました。そして今日の講演者のひとり、映像人類学・音文化研究を専門とする春日聡さんを代表として、共同研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築－沖縄地域の映像を中心に」(2022年度～2024年度)を立ち上げました。

今回の映像フォーラムは、この共同研究での議論をベースとして、「地域文化の再構築における映像の利用」というテーマで、映像から地域の歴史や民俗を読み解く方法や、映像を研究に活用したり、地域の記憶の継承に活用したりするための方法について検討します。

「映像」は、地図、絵画資料、写真なども含む視覚資料として広く捉えることもできます。今日の最初の講演は、那覇市市民文化部の外間政明さんによる「那覇のまちの歴史の変遷 - 古地図・絵画・写真を中心に」です。外間さんのご専門は琉球史で、古地図・絵画資料・写真などの視覚資料を活用した歴史研究に取り組んでいらっしゃいます。那覇のまちの歴史の変遷を、視覚資料からどのように掘り起こす事ができるか、という観点からご講演いただきます。

外間さんとの出会いは、那覇市歴史博物館が所蔵する福地フィルムコレクションのデジタル化がきっかけでした。このフィルムコレクションは、郷土史家である福地唯方氏が1960年代後半～1970年代前半にかけて沖縄各地で撮影した8ミリフィルムで、全87巻から成るものです。これらのフィルムは著しく劣化が進んでおり、フィルムがくっついて固まってしまっている状態で、そのままでは撮影内容を確認することができません。試験的にデジタル復元されたフィルムが沖縄アーカイブ研究所から公開されていて、それを見ると、たいへん貴重な内容であることが予測されるものです。そこで、フィルムの復元方法を、当時、那覇市歴史博物館にいらっしゃった外間さん、フィルムのデジタル化や活用の事業を展開している株式会社東京光音と相談し、宮古島で撮影された2本のフィルムのデジタル復元を試み、その過程を映像で記録しました。

福地フィルム87巻のうち、宮古島のフィルムを復元対象に選んだのは、宮古島の芋麻文化をテーマとして制作中だった研究映像『ブーンミの島』の調査と合わせて、このフィルムに撮影された宮古島のかたがたと、撮影内容や活用方法について一緒に検討していけるのではないかと考えたからです。今日の春日さんのご講演では、「超劣化フィルム」のデジタル復元の過程を中心に、その過程を記録した映像を交えてお話いただきます。そして3つ目の講演は、私、内田によるものです。デジタル復元した超劣化フィルムの活用を、撮影された地域の人たちと考えるために、その地域をフィールドとして研究してきたものとしてどのような取り組みがあり得るかという観点から、映像を交えてお話しします。

## 登壇者の紹介

---

うちだ じゅんこ  
**内田 順子**

国立歴史民俗博物館・教授

- ・『宮古島狩俣の神歌－その継承と創成－』（思文閣出版、2000年）
  - ・「与えられたことば－宮古島狩俣における神歌の継承－」（斎藤英喜編『呪術の知とテクネー―世界と主体の変容―』森話社、2003年）
  - ・『映し出されたアイヌ文化：英国人医師マンローの伝えた映像』（吉川弘文館、2020年）
- 

かすが あきら  
**春日 聡**

多摩美術大学・非常勤講師、国立歴史民俗博物館・客員准教授

- ・映画『ブーンミの島』監督：春日聡（製作・著作：国立歴史民俗博物館／2023年）
  - ・「祭祀芸能における〈音と超越性〉」（細川周平編著『音と耳から考える―歴史・身体・テクノロジー』pp.92-106、アルテスパブリッシング、2021年）
  - ・映画『からむしのこえ』監督・編集：分藤大翼 撮影・録音：春日聡（製作：国立歴史民俗博物館／2019年）
  - ・「祭祀芸能を記録する―民族誌映像における音の考察」（『年刊 藝能』第25号、pp.41-52、藝能学会、2019年）
- 

ほかま まさあき  
**外間 政明**

那覇市 市民文化部 文化財課 担当副参事

- ・『古地図で楽しむ首里・那覇』（風媒社、2022年）
  - ・『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』（琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究編、思文閣出版、2019年）
-

# 那覇のまちの歴史の変遷 —古地図・絵画・写真を中心に

外間 政明(那覇市 市民文化部 文化財課・担当副参事)

## 1. 長虹堤築造以前の那覇

1450年代を反映したとされる『海東諸国紀』中の「琉球国之図」(図1)には、琉球国の中央にあたる部分に「琉球国都」と書かれた大きな黒丸があり、その左下の湾内に「那婆皆渡」・「国庫」・「久面里」と「宝庫」と書かれた二つの島が浮かぶ。「琉球国都」は「首里城」のことである。二つの島に記された「那婆皆渡」は「那覇港」、「国庫」は当時の交易で得た貨物を販売する「御店」だったとされる「親見世」(後に那覇四町の民政を担当した役所)、「久面里」は中国人居住地の「久米村」であり、「宝庫」は交易品の収納管理及び王家専用の御物を納めた「御物城」に比定される。「琉球国之図」からは当時の那覇が、湾内に浮かぶ「浮島」であったことがわかる。この「浮島」が交易の場所であり、中国人が交易のために居留した地域である。



図1 琉球国之図(『海東諸国紀』所載)

現在の那覇市の防災マップを見ると、津波や高潮の危険区域は色が塗られ、比較的安全なところは白地図となっている(図2)。海に近く、かつて「浮島」と呼ばれた地域は青色となるが、那覇商業高校及び上山中学校付近が白色を示し、この地域で海拔が高いことがわかる。この海拔の高い地域がかつての「久米村」であり、「浮島」の中心地域だったであろう。



図2 那覇市の防災マップ

## 2. 長虹堤築造後の那覇

「琉球国之図」に見える「石橋」は、時の国王尚金福が「浮島」と首里の往来を便利にするため、築造させた石橋のことで、岩礁と岩礁を結んだ約1kmの及ぶ海中道路である。長虹堤築造以前、首里と浮島の往来には船を利用し、中国からの使者「冊封使」の来琉の際には、浮島から安里まで船を並べて橋にしたという。1451年、橋の築造を命じられた国相懐機は、安里橋(現崇元寺橋)から、イベガマ(俗に「久茂地のチンマーサー」と呼ばれた道標的なもの)に至るまで、石橋七座を設け、海中道路を完成させた。1633年に来琉した冊封正使杜三策の従客胡靖は、この海中道路を「遠望すれば長虹のごとし」とうたい、それ以降「長虹堤」と称された。石橋の造営後、首里と浮島との往来が容易となり、那覇発展の契機になった。

尚巴志による統一政権の誕生、さらに第二尚氏王統による国内の安定は、港町として機能した「浮島」(那覇)と国都「首里」の整備、機能拡充をもたらした。浮島にあっては、航海の神である媽祖を祀る下天妃宮の創建(1424年)、その後の上天妃宮(創建年未詳)、道教の神を祀る天尊廟の創建(1455年)な

どが行われ、海外交易を担う航海技術、通訳、漢文作成などの職能集団である中国人の定住がうかがえる。港の整備では、中国からの冊封使者の上陸地点「通堂崎」(迎恩亭)が設けられ、貢船を修理する掘割「唐船小堀」が開かれた。掘割の海側は「渡地」と呼ばれ、後に橋が架けられた。渡地には「硫黄城」と呼ばれる丘陵があり、そこは中国への貢品であった硫黄を貯蔵する場所であった。一方、外寇対策もとられ、1522年に首里城から豊見城を経て那覇港南岸に通じる軍用道路「真珠道」を整備し、1554年にはその南岸に突堤を築いて城砦「屋良座森城」を築城した。対岸の北岸は、通堂より突堤を築いて城砦「三重城」を築城(創建年未詳、屋良座森城よりは後といわれる)し、港の入り口を狭め、防御態勢を整えた。

18世紀中頃に描かれたとされる原図を1833年に模写した絵画「琉球図」(図3)は、画面右上端に首里城を描き、そこから左斜め下に向かって泊・那覇を描く。画面中央に描かれた那覇は、浮島(離れ島)であった様子が感じ取れ、港に向けて広がりを見せた街や整備された那覇港の様子がうかがえる。



図3 琉球図(西尾市岩瀬文庫蔵)

15世紀から16世紀中葉にかけて中継貿易を主として展開していた琉球王国の海外交易は、中国の海禁政策の解除やヨーロッパ諸国の東洋進出などにより、17世紀にかけ衰退していった。交易の衰退により久米村、那覇の町の活気が失われていく中、鹿児島薩摩藩島津氏が1609年琉球に侵攻した。

琉球王国は薩摩藩の附庸国となり、江戸幕府を頂点とする幕藩体制へ組み込まれた。一方、琉球の中国への進貢貿易は、貢期の変遷はあったものの継続が許され、1635年からはほぼ2年1貢、1666年からは進貢使者を迎えに行く名目で接貢船が遣されるようになり、実質的には1年1貢の体制が1874年まで続いた。島津氏の琉球侵攻以降の近世琉球は、当初は内政の転換、進貢貿易の貢期の変遷等により不安定な国の経営であった。しかし17世紀中葉以降、羽地朝秀、その後の蔡温などの政治改革により、日本・中国との関係のバランスをうまく取り、さらに両国の文化を取り入れ、琉球的に昇華させながら、南海の独立国として経営していった。

### 3. 県庁所在地としての那覇

1879年(明治12)の琉球処分により、琉球王国は廃され、沖縄県が設置された。置県当初は「旧慣温存」という姿勢で、王国時代の土地制度や税制などは踏襲されたが、那覇では那覇役所が置かれ、東村、西村、若狭町村、泉崎村、久米村、久茂地村、泊村の7カ村を以て那覇の行政区画となった。首里や那覇では、寺院や王国時代の役所跡が、沖縄県の役所や学校、病院、警察署、郵便局などの施設に置き換えられ、薩摩藩の在番奉行所には沖縄県庁が置かれた。これらの施策により、那覇は沖縄県の県庁所在地として、埋め立てや橋の架橋、海上・陸上交通の整備などインフラ整備がおこなわれ、街が拡大・発展していった。

1896年沖縄県では二区五郡制が布かれ、那覇は首里とともに区制が施行され、那覇区と称し、那覇のそれぞれの村は字に改称された。1903年に真和志間切から牧志村を、小禄間切から湖城村・儀間村を那覇区に編入し、1914年字を町と改称するとともに、埋め立てによってできた旭町を加え、

大正期には戦前の那覇の行政区域ができあがった。1921年には首里区とともに沖縄県で初めて本土同様の一般市制が施行され、ここに近代那覇市が誕生した。

王国の海の玄関口であった那覇港は、1907年から那覇港築港工事が着手され、1915年の工事終了時には干潮時の最大水深約7m、1,500t級内外の船3隻が接岸できる港として整備された。さらに、その後の移出入量などの増加により、1921年に港の幅員を広げ、4,500t級汽船も接岸できる栈橋が完成した。

陸上交通の面では、1910年の軽便鉄道法の制定を受け、沖縄県でも1914年12月に那覇と与那原を結ぶ与那原線が開業した。その後も嘉手納線(1922年)、糸満線(1923年)が操業し、また、那覇港へも線路を引き延ばし、貨物運搬の便も図られた。当時ターミナル駅となった那覇駅は、現在はその跡地に那覇バスターミナルが置かれ、交通の要衝となっている。

#### 4. 賑わいを見せる那覇

王国時代から大勢の婦人が集まり、露天に筵を敷いて野菜やイモなどの食糧品、日用品を販売していた那覇の市場は、沖縄県設置後も旧天使館前の広場で行われていた。この場所も1913年の東町の大火により、区画整理が行われ、市場は瓦葺の公設市場として、久茂地川沿いの一角に移転した。那覇の市場は、その賑わい、規模の大きさから「大市」、「那覇市」と呼ばれた。

薩摩藩の在番奉行所に設置された沖縄県庁は、1920年美栄橋(現沖縄県庁所在地)に新築移転した。また、それまで那覇からは長虹堤を通過して崇元寺に至り、そこから安里、坂下を通り首里に上った王国時代以来の道筋も、県庁移転を機に、首里那覇間の新道建設が求められ、1934年に那覇から真和志村を横切る新県道(現国際通り)が完成した。沖縄県庁、沖縄警察署は郊外的美栄橋に移転したものの、警察署跡地には沖縄県で初めてとなる百貨店「山形屋」が1930年に開業するなど、那覇港に通じる戦前の那覇のメインストリートはデパート、商店、郵便局、銀行、市役所などが立ち並ぶ、約8万人の人口を持つ那覇市の顔となった(図4)。



図4 1935年頃の那覇市街図(那覇市歴史博物館蔵)

#### 5. 戦後の那覇の発展

1944年10月10日の米軍の空襲やその後の地上戦により、那覇の街は壊滅的な被害を受けた。沖縄戦終結後、那覇は那覇港が米軍基地とされたため、周辺地域への住民の立ち入りは禁止されていたが、帰村を望む住民の要求に米軍は、食器や鍋・釜など生活物資製造を目的に壺屋の陶工を復興先遣隊として、11月10日那覇の郊外壺屋に入植させた。戦後那覇の復興の始まりである。15日には住居設営・瓦製造を目的に設営隊が牧志に入り、年明けには先遣隊・設営隊の家族も呼び寄せられた。人口増加に伴い住民自治の必要性から行政機構の設置が望まれ、壺屋区役所の設置(1946年1月)、4月には区役所を昇格させた那覇市役所が置かれた。

壺屋・牧志を中心に人が集まるようになると、付近に闇市が発生し、その取り締まりのため、役所は壺屋・牧志を結ぶ道沿いに公設市場を設置した。街の広がりとともに、戦前、野の中を走る一本道でしかなかった新県道周辺にも劇場、商店などが立ち並ぶようになり、牧志街道(現国際通り)と呼ば

れた。牧志街道の発展ぶりは「奇跡の1マイル」と称せられ、この一帯は戦後那覇の中心市街地となっていた。

米軍から沖縄の首都として再建されることを期待された那覇市は、近隣市町村との合併、未開放地域の区画整理、墓地の移転整理、牧志街道の拡幅工事を柱とした都市整備事業を展開した。また、若狭海岸一帯を始め、奥武山、古波蔵・壺川地先、安謝地先の埋め立ても行われ、土地の活用が図られた。



図5 大那覇市市街地図 1958年(那覇市歴史博物館蔵)

都市計画を進める那覇市は、1947年に那覇港の港湾作業隊の居留地域として米軍により特別に設置された行政区「みなと村」を50年に編入し、54年には首里市と小禄村、57年12月に真和志市との合併をおこない、人口18万、面積30km<sup>2</sup>の「大那覇市」が誕生した(図5)。

## 6. 現在の那覇

1972年の本土復帰を迎えると、那覇市内に所在する米軍基地の返還が行われ、1972年に与儀タンクファーム(通称 ガソリタンク)、82年前後に那覇空軍・海軍補助施設(小禄ハウジングエリア)、87年に牧港住宅地区(牧港ハウジングエリア)など、返還後に市街地整備が進められ、区画整理された住宅地・商業地が誕生し、那覇の新しい顔となった。

2021年に市制施行100周年を迎えた那覇市は、人口32万人、面積38km<sup>2</sup>を数える。近隣市村と合併した那覇市は県庁所在地、中核都市として、沖縄県を代表する都市である。しかし、日本の一地方自治体の県庁所在地にとどまらず、かつて海外交易をもって栄えた琉球王国時代の王都首里、港町那覇、久米村、泊村、さらには近隣農業地域の真和志・小禄といった、それぞれ個性を持った地域の歴史・文化を受け継いだ特色ある都市ともいえる。



# 超劣化フィルムのデジタル復元

ふくちただよし  
—福地唯方8mmフィルムコレクションを一例に

春日 聡(多摩美術大学・非常勤講師、国立歴史民俗博物館・客員准教授)

## 1. 概要

令和4年度共同研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に」では、歴博が1988年以来実施してきた研究映像制作の成果、および令和元年度共同研究「歴博研究映像の制作・保存・活用—芋麻文化の映像記録化を中心に」(2019~2021年度、研究代表：春日聡。以下、「前共同研究」とする)の成果に基づき、次のことについて推進している。①歴博研究映像のアーカイブ映像を新規のテーマで研究活用するほか、②前共同研究において実施した福地唯方8mmフィルムコレクション(以下、福地コレクションとする)のデジタル復元。

福地コレクションは、郷土史家である福地唯方が1960年代後半~1970年代前半にかけて沖縄各地で撮影した8mmフィルムで、那覇市歴史博物館が所蔵し、全87巻から成る。87巻はすべて、著しく劣化が進み、フィルムがくっついて固まってしまっており、そのままでは撮影内容を確認することができない状態であるが、現在では得難い貴重な内容であることが予測される。そこで、前共同研究において沖縄県宮古諸島の芋麻文化についての研究映像『ブーンミの島』を制作したこととの関連で、福地唯方によって宮古で撮影された祭祀・行事関連のフィルム2巻をデジタル復元し、その諸過程も映像で記録した。本映像フォーラムで報告を行う。

## 2. 福地唯方 8mmフィルムコレクション

福地唯方は、沖縄の芸能・民俗研究者で、琉球政府文化財保護委員会専門審議委員を歴任した。福地の残した8mmフィルムがご家族から那覇市歴史博物館に寄贈され、沖縄アーカイブ研究所Webサイトで「福地唯方 8mmフィルムコレクション リスト」が公開されている。リストの内容からは、日本返還直前時代の沖縄および先島各地で記録された映像であることが分かる。撮影年代は、1966年から沖縄返還年の1972年である(不明分を除く)。このリストのうち、試験的にデジタル復元されたフィルムが沖縄アーカイブ研究所から公開されている。全87本のうち、宮古で撮影されたものは14本、うち、狩俣集落で撮影されたのは7本である。その中から今回、歴博共同研究で復元したのは次の2本である。

①宮古No.03狩俣「旧正月十八日」(1972年撮影)

②宮古No.08狩俣「とりヤーギ」(1971年撮影)

次に復元作業の工程について詳細を述べる。

## 3. 工程

フィルムの復元、デジタル化(撮影および動画データ化)作業は、株式会社東京光音の3箇所のスタジオで行われ、各工程毎に専門の技師が担当した。東京光音は、映画フィルムやビデオテープ、音声資料のデジタル化を提供している。

### 3-1. 基本工程

(1)フィルム解体

(2)修復

この工程は、東京光音の初台営業所にあるフィルム作業室で行われた。まず、フィルムの状態を確

認する。今回扱うのは、富士フィルム社製NEOPAN CINE 8mmフィルムおよびSingle8(モノクローム)フィルム(ともに3インチリール)である。ビネガーシンドロームが進んだフィルムは、基材層と乳剤層同士が固着してしまっており、これらを引き剥がしフィルムを解していかなければならない。

ビネガーシンドロームとは、フィルムの基材として用いられるトリアセテートセルロース(三酢酸セルロース)の経年による加水分解で、これを使った製品が変性・変形することである。酢酸が生じるため、その臭気を伴う。しかし、それ以前の問題として、フィルムを巻き取っているリール(ボビン)の縁(リム)面に強く接着してしまっている。リールの材質詳細は明らかではないが、現在でも海外で入手可能なリールから推測するとおそらくポリスチレン製であり、ビネガーシンドロームの進行する過程で長期間酢酸に触れ続けることで溶解し、その後フィルム側面とリム同士が固着したことが原因と推測される。やむを得ずリールを破壊することにした。フィルムが破損しないように、リムをニッパーで慎重に割り、剥がして、フィルム自体をむき出しにした。



フィルムリールのリムを破壊した状態

次にフィルム自体を解す工程に移る。はじめに、むき出しにしたフィルムの外周に透明のビニールテープを貼り付ける。フィルムを剥がした際に、破損・散逸してしまうことを防ぐためである。剥がしたフィルムをテープ側に転写(貼付)するのである。

前述の通りフィルム基材層の材質はトリアセテートセルロースで、画像のある乳剤層の材質は一般的にハロゲン化銀の結晶粒子をゼラチン中に分散したものである。これらが経年により固着してしまっている。薄刃のカッターナイフをフィルムの端から差し挟みながらめくっていく。そうすると10cmほどの長さでフィルムの一部を剥がすことができた。フィルムシートフォルダーに収まる約15cmずつ剥がして行く。この作業の繰り返しを延々と行う。場合によっては連続して剥離できない。切れ切れの乾燥ワカメのようなフィルムを、フィルムシートフォルダーに収めていく。Single8は、18コマ/秒で撮影され、1本あたり約3分20秒の撮影可能時間があり、物理的なフィルム長は15m・50ft(3インチリール)である。すべて解すには、根気と長大な時間を要する。作業工程の記録映像撮影は合計12時間におよんだ。



透明テープで保護したフィルムを慎重に剥がしている様子

### 3-2. 画像デジタイズ

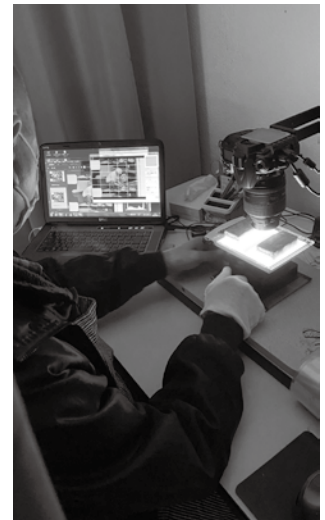
この工程では、前工程で復元されたフィルムを1フレーム毎に撮影していく。東京光音の狛江本社にある撮影スタジオで行われた。暗幕で仕切られた小部屋がスタジオの一角に設えられ写真の複写台(接写台)が設置されている。水平方向に自在にスライドが可能な台上にライトテーブルが設置され、直上には透明スチロール板が1枚設置される。そこにフィルムを置く。複写台の支柱には、デジタル一眼レフカメラが真下を向く形で設置される。カメラ本体はNikon D90、レンズはIF Aspherical MACRO(1:2) AF NIKKOR 24-85mmが使用されるが、マクロ撮影のために52mm口径のリバースアダプター(型番不明)を介して通常とは逆さまに取り付けられる。すなわち通常の撮影におけるレ



レンズが通常とは逆向きに取り付けられたカメラの様子

レンズ前端がカメラ本体側に取り付けられるのである。レンズ前端にはさらに逆付け用リング"BR-3"が取り付けられ、その先にレンズフィルターが取り付けられている(フィルターの詳細は未確認)。カメラは、ラップトップコンピュータとUSBケーブルで結線され、アプリケーション"Nikon Camera Control Pro 2"から直接テザー撮影が行われる(リモート操作および撮影画像の送付)。

技師により、透明板にフィルムが置かれ、水平方向調整・ズームレンズによる倍率調整・フォーカス調整を経て、画像が一フレームずつキャプチャーされる。画像は、フレーム内の内容(本来の被写体)だけではなく、フィルムのパーフォレーションも含めてフィルム幅ごととキャプチャーされる。扱うフィルムの中には著しく欠損しているフレームが存在する。解体・修復工程で透明テープに貼付したフィルムには、粉々になったフィルムのかげらが含まれている。このような状態のフィルムを位置合わせをしてキャプチャーするのは容易ではなく、前後のフレームを目視し比較しながら慎重に進める必要があるため、根気と長大な時間を要する作業である。



フィルムの1フレーム毎に接写している様子

①宮古No.03狩俣「旧正月十八日」(1972年撮影) 4650フレーム

②宮古No.08狩俣「とりヤーギ」(1971年撮影) 4624フレーム

以上合計9274フレームがJPEGファイルフォーマットでキャプチャーされた。作業工程の記録映像撮影は合計16時間30分におよんだ。

### 3-3. 動画データ作成(4K解像度)

(1)フォーマット変換作業(JPEG→DPX)

(2)動画作成

(3)カラーコレクション作業

(4)ファイル変換作業(4K DPX→Full HD ProRes422 HQ)

東京光音の初台営業所にあるグレーディングルームに導入されているFilmLight社製カラーグレーディングおよびフィニッシングシステム"Baselight"を利用して行われた。この工程では、前工程で作成された1フレーム毎の静止画像データを動画編集ソフトウェアのタイムラインシークエンス上に読み込み、1本の動画にする。

はじめに、撮影されたJPEGファイルをDPX(4K)ファイル(\*)に変換する。DPXファイルは"Baselight"のタイムラインシークエンスに連番の通り配置されることで時間軸が付与され動画として再生可能となる。次に、カラーコレクション工程に移る。動画として再生しながらカラーコレクションと画像のサイズや位置合わせを並行して行う。前工程においてキャプチャーした「実体としてのフィルム」画像のパーフォレーションとフィルム端を手がかりに、アスペクト1:1.36に収まるように正しい位置を合わせていく。

なお、モノクロームフィルムのデジタル化であるのにカラーコレクションを行うのは奇異に思われるかもしれないが、グレースケールでは無くRGBスケールでデータ作成をおこなっているためである。「有彩色のモノトーン」が生成されるので、カラーバランスの調整が必要である。正確な色補正を施したビデオモニターで色味を調整していく。同時にレベル補正、コントラスト調整を行



動画データ作成の様子

う。白飛びや黒つぶれを調整し、細部のディテールを明らかにしていく。この工程が終了すると最後にDPX(4K)からFull HD ProRes422 HQへのファイル変換作業を行い、一般的なパーソナルコンピュータでの再生が可能な動画ファイルとして書き出した。本映像フォーラムで上映するのは、納品されたムービーファイルデータ(Full HD ProRes422 HQ)をH.264に変換したファイルである。本工程の記録映像撮影は3時間、それ以前からの作業を入れると合計の作業時間は6時間ほどである。以上のようにすべての工程は、気の遠くなるような作業の連続である。

#### (\*)DPXファイル

DPXとはDigital Picture Exchangeの略。ピクセルで構成されるラスターファイルであり、スキャンしたフィルムの各フレームが可逆デジタル方式で保存される。DPXファイルは、1ファイルが1フレームに対応するため、ストリーム作成用に向く。柔軟で可逆方式のため、様々なポストプロダクションやデジタルエフェクト用ソフトウェアに読み込んで使用可能。フィルムスキャンした画像を保存するファイルフォーマットとして開発され、タイムコードやリールデータなどのメタデータを記録出来る。非圧縮の連番ファイル(静止画)であり、一般的には1 フレームあたり4K 解像度で約50MB、1秒で24 フレーム分、さらに1 時間だと86,400 フレーム分となりデータ容量は約4.4TB になる。

## 4. 課題あるいは可能性

### 4-1. 視聴覚資料の保存における課題

1839年に写真術が、1895年に映画術が公開されて以降、視聴覚資料は、フィルム、磁気テープ、ディスクメディア、データ形式と形を変えてきた。現在では「データ形式」が主流となったが、この「データ形式」も保存において完全なものではない。記録メディアの劣化による破損やデータの消失、再生環境の変化(読込可能なデータ形式、再生機器の旧式化)など、様々な要因で将来的にデータを使用できなくなるおそれがある。

例えば、メディアの寿命が長くとも、対応している再生機・ドライブがなければ中身のデータを読み込むことはできない。すなわち、再生機器の供給・保守期間も考慮する必要がある。すでに現在でも、家庭用ビデオテープ自体は各家庭に保管してあっても再生するビデオデッキは故障し廃棄されて、気軽に視聴出来なくなっている状況が見受けられる。アナログとデジタルの過渡期を通過してきた時代にあって、再生環境の変化に端を発する問題が身近にも存在している。

そして、記録メディアに格納されているデータを長期的に保存・視聴できる状態に維持するためには、視聴覚資料のデジタル化と併せて、データの保管・保存方法についても検討する必要がある。映像や録音物などの視聴覚メディアの適切な保存と利活用のためにはデータマイグレーション(Data migration)を検討しなければならない。これは、データを異なる形式、ソフトウェア、装置間で移動することである。より大容量、高耐久を目指して、新しい記録メディアが次々と開発されている。メディアによっては専用のドライブが必要であったり、技術の進化によって世代が設けられ、読み取りや書き込みには各世代の互換性が限られていることもある。各メディアの特徴とデータの使用目的・使用頻度などを考慮したうえで、古いものから新しいものへ、異なる装置やソフトウェアへのデータの移行・書き換え(データマイグレーション)の検討が必要である。

### 4-2. 映像の復元からはじまる記憶の喚起

今回行った作業は、デジタルドメインでの映像再生を可能にするためのもので、正確に言えば、「フィルムの復元」ではない。すなわち超劣化フィルムを映写機にかけられるように復元してフィルム自体を上映できるようにするのではない。

状態の良いフィルムの実物は保存し上映や分析を通した利活用の方向性が探られる一方で、今回扱

うような劣化フィルムは、映像の内容を確認すること自体が困難なので、たとえ画質に問題があろうとも、映像に記録された内容を再生できることが第一歩である。そのために現在では、アナログメディアをデジタルメディアに変換する様々な技術が蓄積されている。今回行ったのはその最も困難な試みと言えるが、固着したフィルムの中の1フレームに閉じ込められ「固化」していた映像が動き、撮影時の空気感をも想起させるほどの映像体験をもたらすまでになった。復元映像を初めて目の当たりにしたときには、思わず感嘆の声を禁じ得なかった。

2023年12月に、撮影地の宮古島市狩俣集落へ動画データを持参し、数名の関係者に聞き取り調査を実施した。本映像を観てもらったところ、現在では中断している行事における当時の人びとの所作や行われている場所の詳細、行事で使用される道具、着物の柄の種類、映し出された人びとの氏名や祭祀における役名、親族・親戚関係などについて、おおくの情報が口々に語られた。50年後に映像に触れた人びとが、映像をこのように読み解くことを、撮影者である福地唯方本人は当時想像すらできなかつたかもしれない。今後は、より多くの集落住民、地域の関係者、研究者たちに観てもらおうことで、この復元映像をきっかけに人びとの記憶が呼び覚まされ、つながり、あらたな語りが生まれていくのではないだろうか。



宮古No.03狩俣「旧正月十八日」  
(1972年撮影)

同

同

## 参考文献、Web：

アドビ株式会社「DPXファイル」

<https://www.adobe.com/jp/creativecloud/file-types/image/raster/dpx-file.html>

最終アクセス：2023年12月13日(水)19:40

石田晶子 2013 「沖縄におけるミルク信仰の現状―首里赤田町を事例に―」『琉球アジア社会文化研究』pp.30-59、琉球大学

上江洲敏夫 1987 「御仮屋守日記」『沖縄県立博物館紀要』第13号①～⑭、沖縄県立博物館

沖縄アーカイブ研究所

[https://okinawa-archives-labo.com/?page\\_id=4](https://okinawa-archives-labo.com/?page_id=4)

高良鉄夫・黒田長久1969 「琉球における未記録種および稀種」『山階鳥類研究所研究報告』第5巻第5号(No.31)pp. 547-562、山階鳥類研究所

豊見山和美・吉嶺昭 2018 「沖縄県公文書館所蔵映像資料の保存と活用を考える」『沖縄県公文書館研究紀要』第20号 2018年3月号、pp. 55-72、沖縄県公文書館

東京光音「フィルムのアーカイブに最適なフォーマットの紹介① 光音ブログ -きょうの東京光音-」

<https://x.gd/bPNlh>

同「データマイグレーションサービス」

<https://www.koon.co.jp/migration/>

最終アクセス：2023年12月13日(水)19:40

# デジタル復元の成果を地域研究に活かす

内田 順子(国立歴史民俗博物館・教授)

## 1. 宮古島市狩俣(かりまた)の概要

宮古島は、沖縄本島的那覇から南西におよそ326kmのところに、狩俣は、宮古島の北端に位置する。

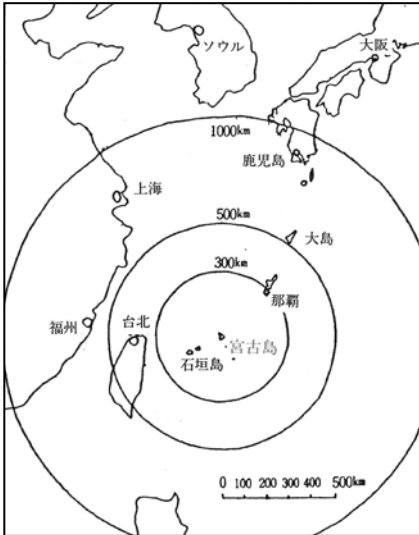


図1 宮古島の位置

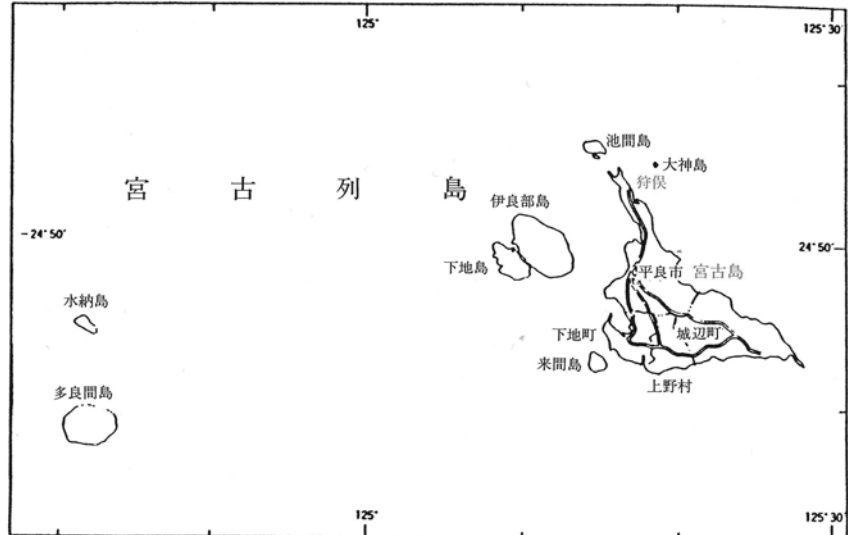


図2 狩俣の位置(平良市史編さん委員会 1987)

平良市街地から狩俣へ至る県道をはさみ、北側と南側に集落が広がる。南側は、かつては畑地であり、大正初期に始まる狩俣集落内からの移住によって、南側にも居住地帯が広がった。

それまでの居住地帯は、県道の北側に限られ、東・南・西側が石垣で囲まれていた。北側には、海拔50mほどの小高い丘陵が連なっている。石垣と丘陵で区切られたこの生活空間をミャークという。

北側の丘陵はヤマと呼ばれ、10数ヶ所の拝所が存在する。拝所にはそれぞれ異なる神々が祀られている。これらの拝所に、無断で立ち入ることはできない。

居住地帯の南および東西には畑地が広がり、さらにその南の海に近いところにパイヌスマと呼ばれる墓地地帯がある。かつては、ほとんどの墓は海に面した岩壁の中腹に掘り抜かれて造られ、人が葬られた後は、ほとんど顧みられることはなかった。狩俣では、この一帯を穢れた場所として忌み嫌い、よりつくこともなかったという(本永 1977)。狩俣の集落は、北側に神々が祀られる聖なるヤマ、南側に穢れたパイヌスマ、その中間に人間の生活空間のミャークがある、という空間構成として捉えることができる。

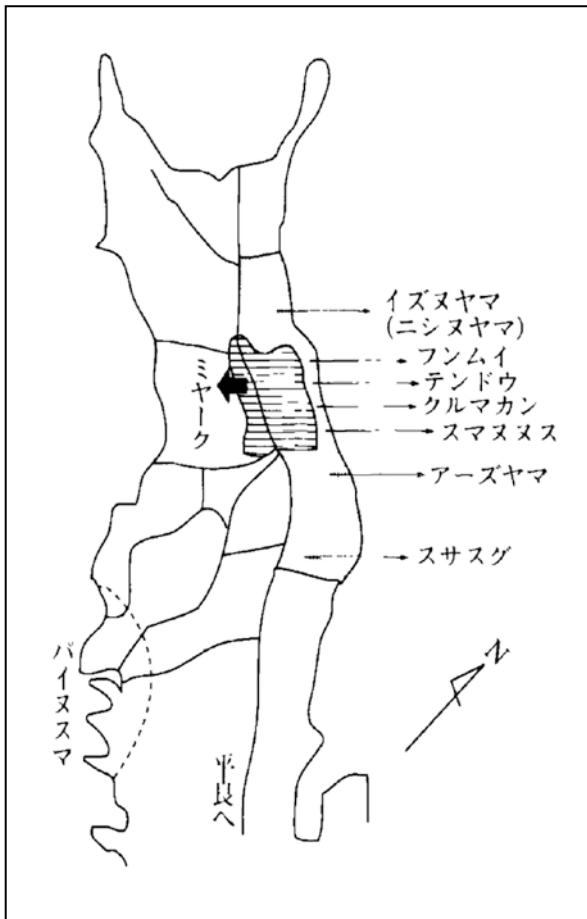


図3 狩侯の空間構成(平良市史編さん委員会 1987)

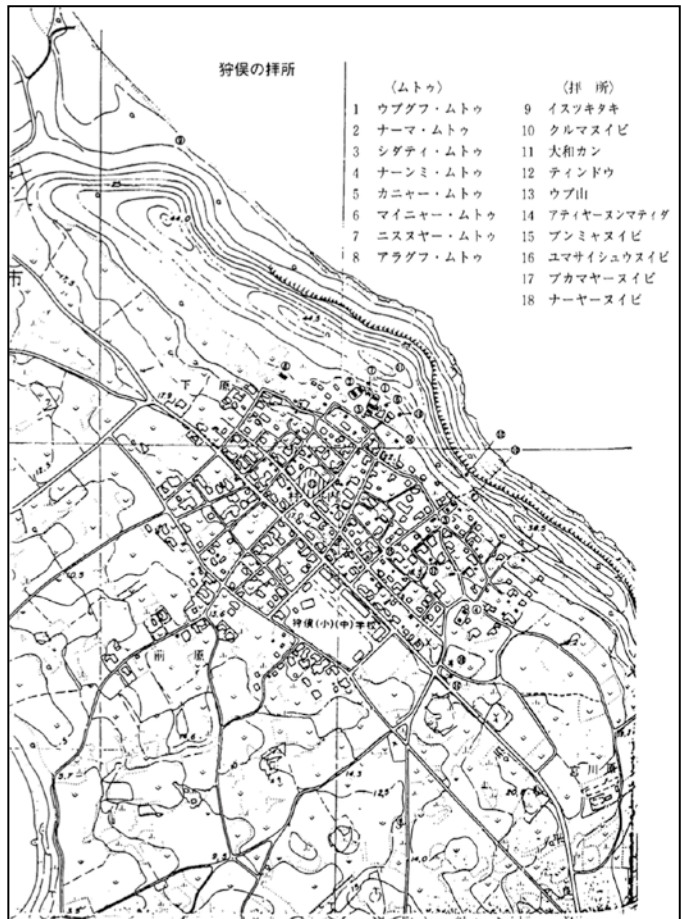


図4 おもな拝所(同左)

## 2. さまざまな記録

狩侯は、宮古諸島の中でも、伝統歌謡や祭祀などの民俗行事の研究が多くなされてきた地域である。狩侯の男性たちが伝承する長大な叙事歌である「狩侯に一り」を稲村賢敷が紹介すると(稲村 1957、1962)、狩侯は研究者の注目を集めた。1964年から狩侯調査に入った外間守善により、男性だけでなく、狩侯の女性たちもさらに長大で膨大で多彩な神歌を伝承していることが明らかにされていった(外間 1968、外間・新里1972、1978など)。また、同じ時期に本永清も狩侯を調査し、狩侯の神話や世界観についての研究のほか、神歌の資料集を作成して平良市史に収めている(平良市史編さん委員会 1987)。1970年代以降は、テレビ局などによって狩侯の祭祀が撮影された。たとえば、1972年にNHKが狩侯と島尻の祭祀を記録した「祖神秘祭(ウヤガンヒサイ)」は翌年放映された。郷土史研究家の福地唯方氏が宮古で撮影した時に、狩侯をそのひとつに選んだのも、狩侯の祭祀が広く注目を集める存在だったからではないか。ほかに、東京芸術大学民族音楽ゼミナールがおこなった調査の際の録音や、それに基づく楽譜集(日本放送協会編 1990)、比嘉康雄による写真や著作なども重要な記録である(比嘉 1991)。

## 3. 共同体の祭祀を司る女性たち

狩侯の祭祀は、最高位の神役であるアブンマを含む四元(ユームトゥ)のツカサを軸に行われる。

四元(ユームトゥ)のツカサ

- ①アブンマ(大城元) 村の草創神(母の神)
- ②ミウニヌス(仲間元) 航海安全の神
- ③ユーヌヌス(志立元) 農耕の神
- ④ミズヌヌス(仲嶺元) 水の神

そのほか、生命を司るウパルズなど、十数名の女性神役組織によって、共同体の行事が伝承されてきた。現在は、神役を引き受ける人がなく、中断している。狩俣で生まれ、そこで結婚して生活している人でなければツカサはできないとされているほか、行事の数は年間40を越え、数日間にわたって聖地に泊る行事もあるなど、50歳前後の働き盛りの女性がこの役割を引き受けるのは時間的にも経済的にも負担が大きい。

#### 4. 狩俣の祭祀で歌われるおもな歌

- ①カミフツ 神様の名前・祈願
- ②タービ 祖先の歴史を歌う(夏の行事：粟・麦の祭り)
- ③ピャーシ 手拍子をうちながら歌う
- ④フサ 祖先の歴史を歌う(冬の祖神祭・ウヤーン行事)  
→見てはいけないとされる場面がある
- ⑤トゥクルフン 足を踏みならしながら歌う(新築した建物、旧正月2日～4日、16日祝い)
- ⑥ニーラーグ 祖先の歴史(旧正月・旧暦6月の夏祭り。男性たちによって歌われる)



①



②



③



④



⑤



⑥

#### 5. 歌い方(よみかたはさまざま)

ひとりでよむ(カミフツ、タービ)

音頭・一同でよむ(フサ・ピャーシ・トゥクルフン・ニーラーグ)

複数で声をあわせてよむ(カミフツ・フサ・アーク)

#### 6. サウンドスケープ(音風景として狩俣の神歌を考えてみる)

①いつ ②どこで ③誰が ④何を ⑤どうやって

聞こえる風景が変わってくる。





図5 1924(大正13)年の狩俣(鎌倉 1982)

## 7. 復元した福地フィルムの内容

福地氏の全フィルムのリストは、沖縄アーカイブ研究所のwebサイトで閲覧できる。全87本のうち、宮古で撮影されたのは14本、うち、狩俣で撮影されたのは7本である。その中から復元したのは以下の2本。

- ①宮古No.03狩俣「旧正月十八日」(1972年撮影)
- ②宮古No.08狩俣「とりヤーギ」(1971年撮影)

## 参考文献：

- 稲村賢敷 1957『宮古島庶民史』私家版  
稲村賢敷 1962『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書  
内田順子 2000『宮古島狩俣の神歌－その継承と創成－』思文閣出版  
鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝(写真)』岩波書店  
日本放送協会編 1990『日本民謡大観(沖縄・奄美)宮古諸島篇』日本放送出版協会  
比嘉康雄 1991『遊行する祖霊神[ウヤガン・宮古島]』ニライ社  
平良市 1999『第27回 平良市統計書 平成10年版』平良市役所  
平良市史編纂委員会 1987『平良市史』第7巻・資料編5、平良市教育委員会  
外間守善 1968「宮古島狩俣の神歌」『文学』12月号、岩波書店  
外間守善・新里幸昭 1972『宮古島の神歌』三一書房  
外間守善・新里幸昭 1978『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』角川書店  
本永清 1977(1973)「三分観の一考察－平良市狩俣の事例－」、日本文学研究資料刊行会編『日本神話』Ⅱ、有精堂

沖縄アーカイブ研究所「福地唯方 8mmフィルムコレクション リスト」  
[https://okinawa-archives-labo.com/?page\\_id=4736#index-fukuchi3-4](https://okinawa-archives-labo.com/?page_id=4736#index-fukuchi3-4)  
宮古島市『令和4年度版 統計みやこじま』第18号  
<https://www.city.miyakojima.lg.jp/gyosei/toukei/2023-0403-1636-12.html>

## 国立歴史民俗博物館の研究映像

歴博では1988年より、民俗研究の一環として「民俗研究映像」の制作をおこなってきました。①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であること、そして④研究成果の発表の手段としての映像による論文であること、という基本方針のもと、制作担当者である研究者自身が、企画から完成までの全てのプロセスに関わり、撮影や編集など、それぞれの研究対象に応じた工夫を凝らし、制作している学術映像です。現在、「歴博研究映像」として受け継がれています。

歴博研究映像一覧表

制作年度	題名	制作担当者	規格
昭和63年度	芋くらべ祭の村—近江中山民俗誌—	上野和男 岩本通弥 橋本裕之	カラー・日本語・100分
昭和64年度	鹿島様の村—秋田県湯沢市岩崎民俗誌—	岩井宏實 福原敏男	カラー・日本語・59分
平成2年度	椎葉民俗音楽誌1990	小島美子	カラー・日本語・120分
平成3年度	金沢七連区民俗誌 第1部 都市に生きる人々 第2部 技術を語る	小林忠雄 菅豊	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・45分
平成4年度	黒島民俗誌—島譜のなかの神々— 黒島民俗誌—牛と海の賦—	篠原徹 菅豊	カラー・日本語・60分 カラー・日本語・60分
平成5年度	景観の民俗誌 東のムラ・西のムラ	福田アジオ 篠原徹 菅豊	カラー・日本語・各58分
平成6年度	観光と民俗文化—遠野民俗誌94/95— 民俗文化の自己表現—遠野民俗誌94/95— 遠野の語りべたち	川森博司	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・29分
平成7年度	沖縄・糸満の門中行事—門開きと神年頭—	比嘉政夫	カラー・日本語・110分
平成8年度	芸北神楽民俗誌 第1部 伝承 芸北神楽民俗誌 第2部 創造 芸北神楽民俗誌 第3部 花	新谷尚紀	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・48分 カラー・日本語・29分
平成9年度	風の盆ふい—りんぐ—越中八尾マチ場民俗誌—	小林忠雄	カラー・日本語・90分
平成10年度	大柳生民俗誌 第1部 宮座と長老 大柳生民俗誌 第2部 両墓制と盆行事 大柳生民俗誌 第3部 村境の勧請縄	新谷尚紀 関沢まゆみ	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・36分 カラー・日本語・16分
平成11年度	沖縄の焼物—伝統の現在	松井健 篠原徹	カラー・日本語・83分
平成12年度	風流のまつり 長崎くんち	福原敏男 久留島浩 植木行宣	カラー・日本語・94分
平成13年度	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二 内田順子	カラー・日本語・90分

制作年度	題名	制作担当者	規格
平成14年度	物部の民俗といざなぎ流御祈禱	松尾恒一 常光徹	カラー・日本語・83分
平成15年度	出雲の神々と祭り 第1部 美保神社 出雲の神々と祭り 第2部 佐太神社 出雲の神々と祭り 第3部 荒神祭り	関沢まゆみ 新谷尚紀	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・15分
平成16年度	現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業 —長野県飯田下伊那地方 村落における公共施設での葬儀 —長野県下條村宮嶋家 都市近郊における斎場での葬儀 —長野県飯田市佐々木家 葬儀用品問屋と情報	山田慎也	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分
平成17年度	AINUPastandPresent マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子 鈴木由紀	カラー・日本語・102分
平成18年度	伝統鴨猟と人々の関わり—加賀市片野鴨池の坂網猟—	安室知	カラー・日本語・37分
平成19年度	興福寺 春日大社 —神仏習合の祭儀と支える人々— 薬師寺 花会式—行法と支える人々—	松尾恒一	カラー・日本語・71分 カラー・日本語・71分
平成20年度	筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—〔本編〕 筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—〔列伝篇〕	小池淳一	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・99分
平成21年度	平成の酒造り〔製造編〕 平成の酒造り〔継承・革新編〕	青木隆浩	カラー・日本語・88分 カラー・日本語・88分
平成22年度	アイヌ文化の伝承—平取 2010 アイヌ文化の伝承—白老 2010	内田順子	カラー・日本語・40分 カラー・日本語・40分
平成23年度	比婆荒神神楽—地域と信仰—	松尾恒一	カラー・日本語・69分
平成24年度	石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新—〔本編〕 石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新—〔技術編〕 石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新—〔インタビュー編〕	松田睦彦	カラー・日本語・69分 カラー・日本語・51分 カラー・日本語・59分
平成25年度	盆行事とその地域差—盆棚に注目して— 土葬から火葬へ—両墓制の終焉— 甌島の盆行事	関沢まゆみ	カラー・日本語・50分 カラー・日本語・28分 カラー・日本語・20分
平成26年度	屋久島の森に眠る人々の記憶	柴崎茂光	カラー・日本語・80分
平成27年度	明日に向かって曳け—石川県輪島市皆月山王祭の現在—	川村清志	カラー・日本語・102分
平成28年度	モノ語る人びと 津波被災地・気仙沼から	葉山茂	カラー・日本語・63分
平成29年度	二五穴—この水はどこへ行くのか— 二五穴—水と米を巡る人びとの過去・現在・未来—	西谷大 島立理子 内田順子	カラー・日本語・20分 カラー・日本語・40分
平成30年度	からむしのこえ	分藤大翼	カラー・日本語・93分
令和4年度	ブーンミの島	春日聡	カラー・日本語・113分

M E M O

---

---

# ご案内

## 【展示のご案内】

- ・第1展示室特集展示「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」  
開催中～2024年2月12日(月・休)
- ・第3展示室特集展示「新出の野村コレクション」  
開催中～2024年2月4日(日)
- ・第4展示室特集展示「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」  
開催中～2024年2月25日(日)
- ・企画展示「歴博色尽くし」  
2024年3月12日(火)～2024年5月6日(月・休)

## 【催事のご案内】

- ・第449回歴博講演会「知を編む人びと—江戸時代の蔵書文化—」  
2024年1月13日(土)13:00～15:00  
講師：工藤 航平(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系・准教授)
- ・第450回歴博講演会「歴史ではなく、記憶：日本アニメが作る第二次世界大戦のイメージ」  
2024年2月10日(土)13:00～15:00  
講師：アルト ヨアヒム(国立歴史民俗博物館研究部・特任助教)
- ・第451回歴博講演会「土器・鉄・年代・DNA」  
2024年3月9日(土)13:00～15:00  
講師：藤尾 慎一郎(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・教授)

※要事前申込み、聴講無料

## 【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ウェブサイト・X(旧Twitter)・YouTube・ニュースレター(メルマガ)でもご案内しています。

- ウェブサイト <https://www.rekihaku.ac.jp/>
- X(旧Twitter) @rekihaku
- YouTube <https://www.youtube.com/@NMJH>
- ニュースレター ウェブサイトのトップ画面に「れきはくニュースレター」のアイコンがあり、そこから登録画面に進めます。

---

歴博映像フォーラム17

## 地域文化の再構築における映像の活用

発行日 2024年1月20日

編集・発行 国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

Tel.043-486-0123(代)

---



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
**国立歴史民俗博物館**  
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-21-3



9784909293213